

の大きいなる変貌についても、詳細記録を残して、村の向うべき方向を示し、記録を後世に伝えなければならぬと思った。町村合併のあわただしい中で、前村長牧原氏もこれを考慮されたことがあったと聞いている。私はこれを、この秋の北会津村成立十周年記念式までに間にあわせたいと思った。

村誌編さん委員の準備委員会のようなものをつくって、はかってみだが、いざこれを発足させるとなると、古い記録とて殆どもない村の生活発達史など、どこから手をふれてよいやら、皆目、見当もつかない始末であった。

この時、隣の大沼郡新鶴村新屋敷新田出身で、十年前に立派な新鶴村誌を編さんして残した山口弥一郎氏のあることを思い出した。氏は地理学で理学博士の学位を得、現在東京の亜細亜大学教授の職にある。その上福島県では文化財専門委員、県史編さん委員などと、多忙な仕事をしておられる。しかし私は、氏において村誌編さん委嘱者はないと思いきんだので、準備委員の方々にはかり、北会津村には氏の親戚縁故者も多いので、それらの方々にも口添え願って、約半カ年かけて、ついに快諾を受けるところへこぎつけた。私はこれでもう成ったような感激さえ覚えた。

氏の一カ年の仕事ぶりは全くあざやかであった。そのためには、委員は勿論区長さんまで召集、協力させられた。「村誌は将来の村人のために、村人自身がつくって残すべきものである。」というのが氏の信条のようである。そして、くまなく村々を廻り、村人と語り、調査する、手堅い実地の仕事から始められ